

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870120

研究課題名(和文)色彩療法とニューエイジ：スピリチュアル・ブームの表象文化論的研究

研究課題名(英文)Color Therapy and New Age Movements: Visual Studies on Spiritual Trends

## 研究代表者

加藤 有希子 (KATO, Yukiko)

埼玉大学・基盤教育研究センター・准教授

研究者番号：20609151

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、美学芸術学、表象文化論分野ではほとんど主題化されたことのなかった第二次世界大戦後の色彩療法(color therapy)の実態を、ニューエイジ運動、スピリチュアリズム、自己啓発運動との連関から明らかにした。色彩療法/カラーセラピーは19世紀末から神経心理学とともに発達したが、20世紀半ばのニューエイジ運動により神秘性やオカルト性が付与されるようになった。現在ではスピリチュアル・ブームの一端として、特に若い女性の間で人気を高めている。本研究はこの「誰でも聞いたことはあるが、その源泉はわからない」色彩療法の理論的基盤を分析し、現代人の欲望と信仰の体系を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study thematized post-WWII practices of color therapy, which had rarely been studied in the fields of art history and visual studies. The study especially focused on their relationships with New Age movements, Spiritualism, and self-development movements. Color therapy has developed with neuro-psychology since the late 19th century. From the mid-20th century on, however, it has taken on spiritual characters. Nowadays, it has become popular among young women as a part of spiritual trends. This study has analyzed such people's desires and beliefs by clarifying the theoretical bases of color therapy, with which many people are familiar in contemporary Japan, but do not know whose origins.

研究分野：美学芸術学

キーワード：色彩療法(カラーセラピー) 高度消費社会 ニューエイジ スピリチュアリズム 自己啓発 現代信仰論 C・W・リードビーター

## 1. 研究開始当初の背景

第二次大戦後から現在に至るまで、ニューエイジ系の色彩療法の著作が、欧米を中心にさかんに出版されてきた。その人気は1990年代以降、スピリチュアル・ブームに乗って高まる一方であった (Jean-Claude Nobis、Stephanie Norris、Gérard Edde、Betty Wood、Michèle Delmas、Gilbert Shakra、Pauline Wills など多数)。しかしその多くが科学的な根拠に基づかない口伝の療法を拠り所としているため、学術的で批判的な研究、すなわちメタ研究がほとんどなされてこなかった。国内外の著名な色彩学者ジョン・ゲージ、ジョルジュ・ロック、デヴィッド・バッチェラー、小町屋朝生、前田富士男、大山正らも、いわばオカルト色の強いこの一分野を事実上、学術的研究の対象から除外してきた。唯一の例外として色彩学者フェーバー・ピレンが1960年代から70年代にかけて若干の主題的著作を残しているが (Birren 1961、1978)、昨今のニューエイジ思想を基盤にした色彩療法の人気の高まりを鑑みるに、十分な研究とは言い難かった。

## 2. 研究の目的

本研究は、美学芸術学、表象文化論分野ではいまだほとんど主題化されたことのない第二次世界大戦後の色彩療法 (color therapy) の理論的源泉を、ニューエイジ運動、スピリチュアリズム、自己啓発運動との関連から明らかにすることが目的であった。色彩療法は19世紀末から神経心理学とともに発達したが、20世紀半ばのニューエイジ運動により神秘性やオカルト性が付与されるようになった。現在ではスピリチュアル・ブームの一端として、色彩療法の著作は日本を含む全世界で数多く出版されている。本研究はこの「誰でも聞いたことはあるが、その源泉はわからない」色彩

療法の理論的基盤を分析し、現代人の欲望の体系を明らかにすることが目的であった。

高度にグローバル化した社会において旧来の形式主義的・排他的な宗教を信仰することは困難を極める。ニューエイジ、スピリチュアリズム、自己啓発といった現代の信仰は、この「反・既存宗教」の一大勢力である。色彩療法はその一大勢力の人々がしばしば信奉する民間療法であり、そこには旧来の信仰を奪われた人々の信仰体系の本質が隠されている。それゆえ色彩療法を分析することは、現代人の信仰のあり方とその苦悩を明らかにすることでもあった。

## 3. 研究の方法

(1) 19世紀末から現在までの色彩療法の歴史と成り立ちを、神智学者C・W・リードビーターの理論を軸に明らかにした。その際、リードビーターが1927年に出版した著作『チャクラ』を精読するとともに、それが1960年代以降のニューエイジ運動に与えた影響も明らかにした。

(2) 現在人気の高い色彩療法の一つであるオーラソーマの教室で、6日間の参与観察を行い、講師および受講者にインタビューを行った (東京都)。その際、とりわけオーラソーマの実践者の信仰のよりどころ、また「自己」に対するとらえ方を明らかにするよう努めた。

(3) 色彩療法の理論的基盤となっているシンクロニシティの概念の源泉を知るために、ユングの「非因果的連関の原理」を分析した。その際、伝統的宗教が提供する神に代わり、「偶然の一致」に夢を託すことは、現代のグローバル化し、情報化した高度消費社会において、なぜ必然的帰結となったのかを考察した。

(4) 積極思考、自己啓発など、現代の色彩療法の信仰を支えるディスクールを分析するため、昨今隆盛を極めている自己啓発本ブームの実態や、これらの著作を分析した社会学関係の資料を参考にした。

#### 4. 研究成果

上記「研究の方法」で明らかにした方法に従い、オーラソーマの参与観察と、積極思考についての論文を2本執筆したあと、それに書き下ろしの記事を3本加えて、単著『カラーセラピーと高度消費社会の信仰

ニューエイジ、スピリチュアル、自己啓発とは何か?』(サンガ、2015年9月)を出版した。この著作は、グローバリズムの多様性をめぐる良心から、どのような特定の神も信仰しえなくなった高度消費社会の住人が、オーラソーマのような無害で自己省察的な信仰に耽溺していく様子を明らかにした。情報化された高度消費社会の住人にとって、信仰のような非合理的な姿勢が許されるのは、唯一「自己」の領域にとどまる範疇においてある。戦争や飢餓のような共通の苦悩が稀になった日本社会において、「自己」と「偶然」に耽溺せざるをえない現代人の苦悩を追った。

この著作は理論面で、「自己」、「自己啓発」、「シンクロニシティ」、「積極思考」、「高度消費社会」などの現代日本社会でキーになる概念の考察を積極的に行っている。その出発点として、昨今人気のオーラソーマ教室への参与観察(東京都)を6日間行ったことは、この研究のオリジナリティとして強調したい。そこで講師、ならびに多くのオーラソーマ受講生のなまの声を聞くことができた。

端的に言って、彼女ら(受講生は全員女性

であった)は現代日本の多くの人々を代表するように、国際社会、情報社会に生き、他者への配慮ゆえに伝統的な信仰に身を投じえない悩みをかかえていた。また仕事や家庭などでさまざまな悩みをかかえつつも、それが客観的に見て軽微な悩みであるゆえに、相談できない苦悩を抱えていた。

こうした誰にも頼れない女性たちが拠り所とするのが、自己責任型の積極思考であり、また感性的認識を活動の基盤にもつ色彩領域の活動であった。オーラソーマに限って言えば、このような傾向は、若い世代の女性に限定的な現象であるが、昨今の自己啓発本や自己啓発セミナーの隆盛ぶりをみると、これは単に世代や性別を限定してよい問題ではなく、信仰の場を失った高度消費社会、高度情報社会の抱える必然的な問題と言えよう。

またこの著作では、現代の色彩療法に通じる信仰を生み出した重要な人物として、神智学者のC・W・リードピーターを取り上げた。彼の著作『チャクラ』(1927)は、人体に7つのチャクラを指し(伝統的なヨガ・スートラでは6つ)、そこに虹の7色を配した。そして特定の色彩が、特定のチャクラを活性化するという理論をつくりあげた。神や仏ではなく、身体に信仰の場を指した点で、リードピーターの『チャクラ』は現代の信仰を特徴づけるニューエイジ、スピリチュアル、自己啓発のいわば原点となる思考法を提示している。イギリスで生まれ、インドで修業し、オーストラリアで晩年を過ごしたリードピーターは、彼の生活の中で、さまざまな宗教に触れ、いち早く国際化社会を体験した人物である。彼は、他の宗教や無宗教への理解をもち、個人個人がそれぞれ信じる信仰を貫くことを願った。それは現代に生きる私たちが、

もはや共通の宗教的基盤、信仰基盤を持ちえない状況を予見していたと言えよう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

加藤有希子「色彩療法オーラソーマ参与観察 2014 年 8 月、いかがわしさと常人性のはざままで」、外山紀久子編『気の宇宙論・身体論 musica mundane』、埼玉大学教養学部、リベラル・アーツ叢書 6、埼玉大学教養学部・文化科学研究科、2015 年 3 月、67 - 98 頁。

加藤有希子「ポジティブじゃなきゃだめなのか? 積極思考の功罪と現代資本主義の信仰」、立命館大学生存学研究センター編『生存学』、Vol.8、2015 年 3 月 31 日、263-276 頁。

〔学会発表〕(計 1 件)

加藤有希子「色彩療法にみる現代の苦悩と欲望 私たちはなぜオーラを見たいのか?」、musica mundana: 気の宇宙論 / 身体論、2014 年 3 月 21 日、埼玉大学教養学部。

〔図書〕(計 1 件)

加藤有希子『カラーセラピーと高度消費社会の信仰 ニューエイジ、スピリチュアル、自己啓発とはなにか?』、サンガ、2015 年 10 月、221 頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織 (1) 研究代表者

加藤 有希子 (KATO, Yukiko)  
埼玉大学・基盤教育研究センター・准教授  
研究者番号：20609151

(2) 研究分担者 ( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：